松本市文化財調査報告No.40

松本市梶海渡遺跡

——緊急発掘調査報告書——

信州大学附属図書館
定期刊行物

1986.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

松本市梶海渡遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1986.3

長野県中信土地改良事務所
松 本 市 教 育 委 員 会

序

この遺跡調査は中央自動車道長野線の建設と時を同じくして、高速道関連ほ場整備事業神林地区が区画整理工事を施工するに先立ち緊急発掘調査し、記録保存したものであります。

調査の実施は松本市教育委員会に全面的に委託し発掘調査が行われました。その結果、数多くの遺構、遺物の出土を見、地区の歴史を知るうえで貴重な資料となることと思います。

この発掘調査が計画どおり完了できましたことは、県、市、教育委員会の適切なご指導と、お忙しい中、調査団に参画され発掘調査にあたられた皆様のご尽力のたまものと感謝しております。

なお遺跡発掘が支障なくできましたことは、神林川土地改良区の役員、地元関係者のご協力とご理解によるものであり、心より感謝の意を表します。

昭和６１年３月

長野県中信土地改良事務所長　　大　山　忠　清

序　　文

神林地区は今まで遺跡の少ない地域でしたが、ここ数年前より中央道長野線の本線及び周辺の発掘調査の結果、古代集落のあったところということが判明して来ました。

今回の発掘調査は県営ほ場整備事業に先立つ緊急発掘調査であり、８月の暑さの中、梶海渡水月院北隣を調査いたしました。その結果は本文に詳細に述べられておりますが、現水田面より１ｍあまりで平安時代の建物址などを検出し、鎖川を隔てた下神遺跡との関連を知る手掛かりを与えてくれました。

本調査には地元神林地区の方々はじめ多くの方々にご協力頂きました。記して感謝申しあげます。また関係機関の方々にも種々ご協力を頂きました。併せてお礼申しあげます。今回の調査結果は大きな成果を挙げ得るには至りませんでしたが、本書が今後の調査の一助になれば幸いであります。

昭和６１年３月

松本市教育委員会

教　育　長　　中　島　俊　彦

例　　言

1．本書は昭和60年８月17日から９月15日にわたって実施された松本市神林に所在する梶海渡（かじかいと）遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査であり、長野県中信土地改良事務所より委託を受け、松本市教育委員会が調査を行ったものである。

3．本書の編集は事務局が行い、執筆は第２章　太田守夫、第４章　神沢昌二郎、その他の項目は熊谷康治が行った。

4．本書作成にあたっての作業分担は次の通りである。

遺構　製図、トレース：向山かほる、熊谷康治

遺物　復元、実測、トレース：土橋久子

5．本書掲載の遺物写真は岩渕世紀氏にお願いした。

6．出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　調査経過及び調査体制……3

第２章　遺跡の立地と地理的環境……5

第３章　調査の結果……9

第４章　調査のまとめ……16

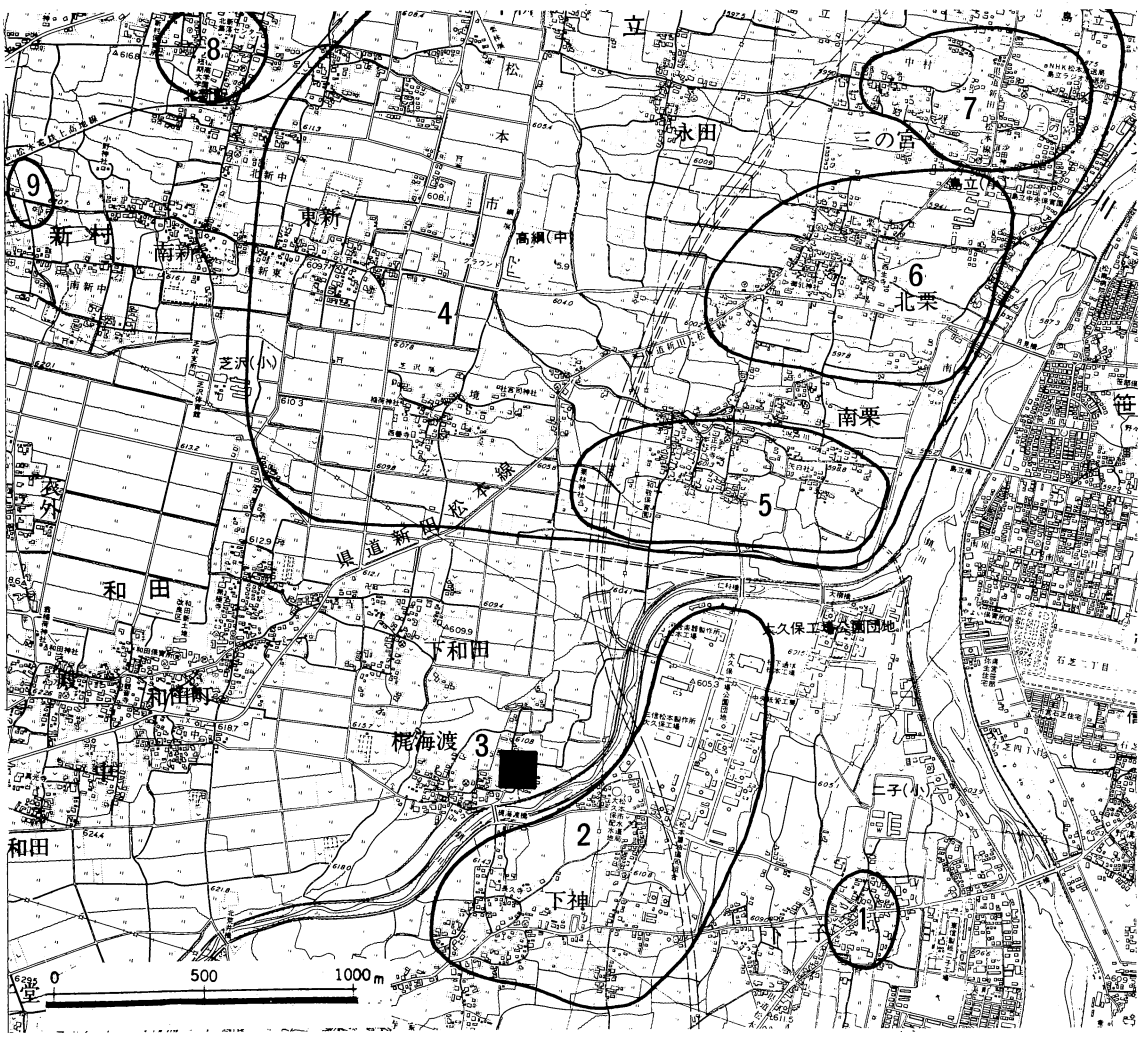
第１章　調査経過及び調査体制

１．経　　過　昭和59年７月、県営ほ場整備に先立つ埋蔵文化財保護協議を現地にて行う。その結果工事に先立ち発掘調査を行うことに決め、60年度補助事業として取り上げてもらうことにする。本址は昭和60年の秋場施工に間に合うよう、８月17日より調査に入ることとした。

２．調査体制　調査にあたって調査団の編成を行った。調査団長　中島俊彦教育長、発掘担当者　神沢昌二郎文化係長、現場責任者　熊谷康治主事、調査員　太田守夫、作業員　三沢元太郎、瀬川長広、中島新嗣、藤牧則夫、藤牧豊子、赤羽大三、上條則子、小松路子、巾下キヨミ、古畑ミツ子、筒井とりへ、小林照代、赤羽槇子、倉科よし子、巾下純二。

３．調査日誌

８月17日　㈯　晴。資材運搬と試掘。三沢他１名
　19日　㈪　晴。重機による排土作業。
　20日　㈫　晴。前日の継続。墓址検出。倉科他３名
　21日　㈬　晴。調査区拡張。検出作業。上條他１名
　22日　㈭　晴。検出作業継続。溝の東側より柱穴検出。倉科他７名
　23日　㈮　晴。拡張区の排土と検出。調査区に測量ポイント設定。上條他７名
　24日　㈯　晴。ピットの半割。溝２掘り下げ。調査区東側にトレンチ設定。倉科他５名
　26日　㈪　晴。拡張部再検出。溝２掘り下げ。ピット断面図作成、掘り下げ。上條他６名
　27日　㈫　晴。ピット半割、断面図作成。上條他５名
　28日　㈬　晴。前日の継続。建物址、ピットの写真撮影。溝１にトレンチ設定他。上條他５名
　29日　㈭　晴。中央北側の排土作業。ピットの実測、土壙１、溝１の掘り下げ。上條他５名
　30日　㈮　曇後晴。全体図作成。溝１にトレンチ追加設定。土壙１の掘り下げ。上條他６名
　31日　㈯　曇時々晴。全体図作成。溝１にトレンチ追加。溝３掘り下げ。上條他７名
９月２日　㈪　晴。溝１の一部掘り下げ。土壙１の掘り下げ再開。上條他６名
　３日　㈫　晴。黒色土部分の再検出。トレンチ設定。掘り下げ。上條他６名
　４日　㈬　晴後曇。溝２周辺の再検出。全体図作成。上條他５名
　５日　㈭　晴。溝４～６の検出及び断面図作成。
　６日　㈮　晴後曇雷雨あり。前日の継続。溝１、２周辺検出。上條他４名
　７日　㈯　晴後雨。焼土Ⅰ・Ⅱの検出及び断面図作成。
　８日　㈰　晴。焼土Ⅰ・Ⅱの写真撮影。溝４～６掘り下げ。倉科他４名
　９日　㈪　晴。焼土Ⅰ掘り下げ及び実測。溝４～６平面実測。藤牧（則）他４名
　10日　㈫　薄曇。焼土Ⅱ掘り下げ及び実測。上條他６名
　12日　㈭　曇後晴。平面図へのレベル記入。地形地質の調査。小林他１名
　15日　㈰　曇時々雨。作業終了。資材撤収。中島



第１図　発掘調査地及び周辺遺跡図

神林地区は松本市の西南に位置し、本址の西南側を鎖川が流れ、奈良井川との合流点を中心とした地域には、特に平安時代の遺跡が多く分布している。遺跡は南から牛の川（縄文・平安）、神戸（平安）、くまのかわ（縄文・奈良・平安）と奈良井川左岸に続き、更に西側へ寄って１の下二子遺跡（平安）２の下神遺跡に続く。下神遺跡は平安時代の住居址、建物址延120軒あまりが検出され、大集落の存在をうかがわせている。鎖川を渡って３の本址があり、これから北へは４の新村、島立条里的遺構（平安以降か）、５の南栗遺跡（平安～室町）、６の北栗遺跡（平安中心）、７の三の宮遺跡（平安中心）と奈良井川左岸の段丘上に集落は続く。西北の新村には８の秋葉原遺跡（古墳・江戸）や９の安塚古墳があり、古墳時代末の群集墳を形成している。今回調査の本址でも周辺では水道工事等で土師器、須恵器等が出土しており、４以降に続く遺跡群の最南端とみることができる。

第２章　遺跡の立地と地理的環境

１　遺跡の位置と周辺の地形地質

本遺跡は、松本市神林梶海渡集落の北東、水月院の北に位置している。集落に続く水田域で、海抜610～615m、鎖川の北岸（左岸）に沿っていて、北東へ緩く傾いている。（$\frac{10}{1000}$）地形的には、梓川・鎖川両扇状地の接触点であり、また三間沢川の延長の凹地にも当る扇状地性の沖積地である。現在、両扇状地の堆積の接触がわかっているところは、和田太子堂の地下、神林水道水源地の地下で、いずれも鎖川の堆積物が梓川の堆積物を覆っている。

本遺跡及び周辺の堆積層は、鎖川扇状地の末端に当るものと考えられている。鎖川は、昭和58年松本市文化財調査報告書No.29に述べたように、現在の菅野中学校付近から中二子・下二子付近に至る地域に、著しい砂礫を堆積し、以後次第に流れを西へ移動させたものとみられる。乱流の起点を今井地籍におき、その先端は下神まで及んでいる。実際に下神の長久寺付近の地下に、N60°Eの方向をみる砂礫層の堆積が幾条か発見されている。現河床は最も西寄りになったものが、北東へ向きを換え両扇状地の接触点付近の凹地を流れ下っている状態である。もともと鎖川は、川西・川東より下流は、高さ１m前後、幅数m程度の天井川であったが、戦後高さ数m、幅50m前後の規模に拡大された。旧天井川のころに調査された「東筑摩郡松本市誌自然篇土壌」によると、川に沿い浅い土壌（砂礫層まで20cm）が報告されている（現在堤防下に埋没しているかもしれない）。今回の発掘でもこの堆積状況を予想したが、意外な土層の厚さに驚いた。更に集落の西、北ともに同様な厚さであって、その深さを土地の人は１丈（1.8m）といっている。しかも下神地域におけるような土層と砂礫層が並行することなく、土層が全面に広がっている（ほ場整備事業施行中）。周辺地域で浅い部分に砂礫がみられるのは、川西・北荒井・栗林神社付近で、他に土地の人は集落の北東の水田下の土層中に砂礫を観察しているが、これらの連続は現在不明である。

地下水は滞水の砂礫層が低いので得られない。地下水は奈良井川の面と同じといわれている（梶海渡海抜610m、奈良井川面600m、大久保団地（大久保原）松本水道局井の自然水位11.85m）。

土壌は砂分を適度に混じえた壌土で、最下層の黄土色土層はローム質でやや粘性である。

２　遺跡の堆積層と礫

遺跡の土層は次ページの土層断面図に示す通りで２m近くに達する。上層と下層土(1)の間は、遺跡の東部に一箇所厚さ５cm、長さ１mほどの細砂層がみられただけで、不整合の状態は発見されていない。下層土(1)は褐色ローム質壌土、下層土(2)は黄土色ローム質で粘性がある。遺構や遺物は下層土(2)の上部で発見されている。下層土(2)の下部は礫層を挟在するようになり、２m近くの深さで基底礫岩が現われる。土地の人のいう土層の深さ１丈（1.8m）に符号する。

礫層の礫種は挟在層、基底層とも、砂岩(硬砂岩)、粘板岩、チャートに半花こう岩がわずか含まれている。礫径は15×15cm、15×10cm、10×10cm等の中・大礫の円礫である。

遺構とみられる二条の溝の方向は南北とN40°Eで、鎖川の方向を向いているが関連性は不明である。

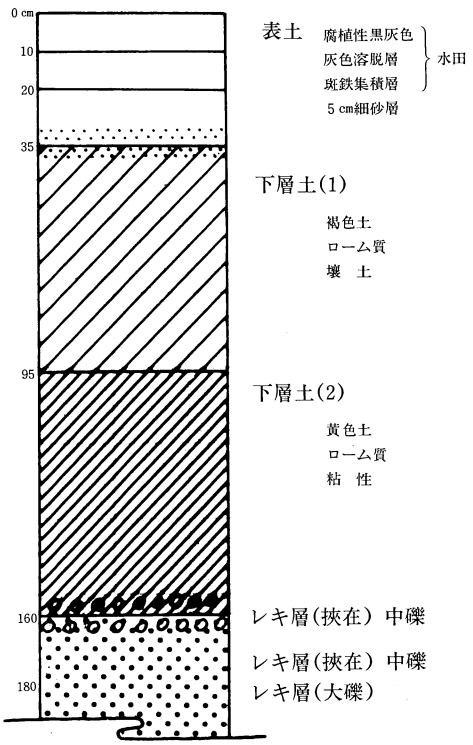
3　まとめ

(1)遺跡及び梶海渡地区を支配する地形面は鎖川扇状地である。

(2)基底礫層や挟在する礫層は鎖川系である。

(3)遺跡に堆積する上層土は耕土。下層土は(1)は砂分を適度に含む壌土で、ローム質。粘性のある下層土(2)とは堆積環境が違っている。

(4)下層土(2)は上流のローム層を浸食して流れた、当時の堆積のように考えられる。従って古い三間沢川の堆積も含まれている可能性がある。



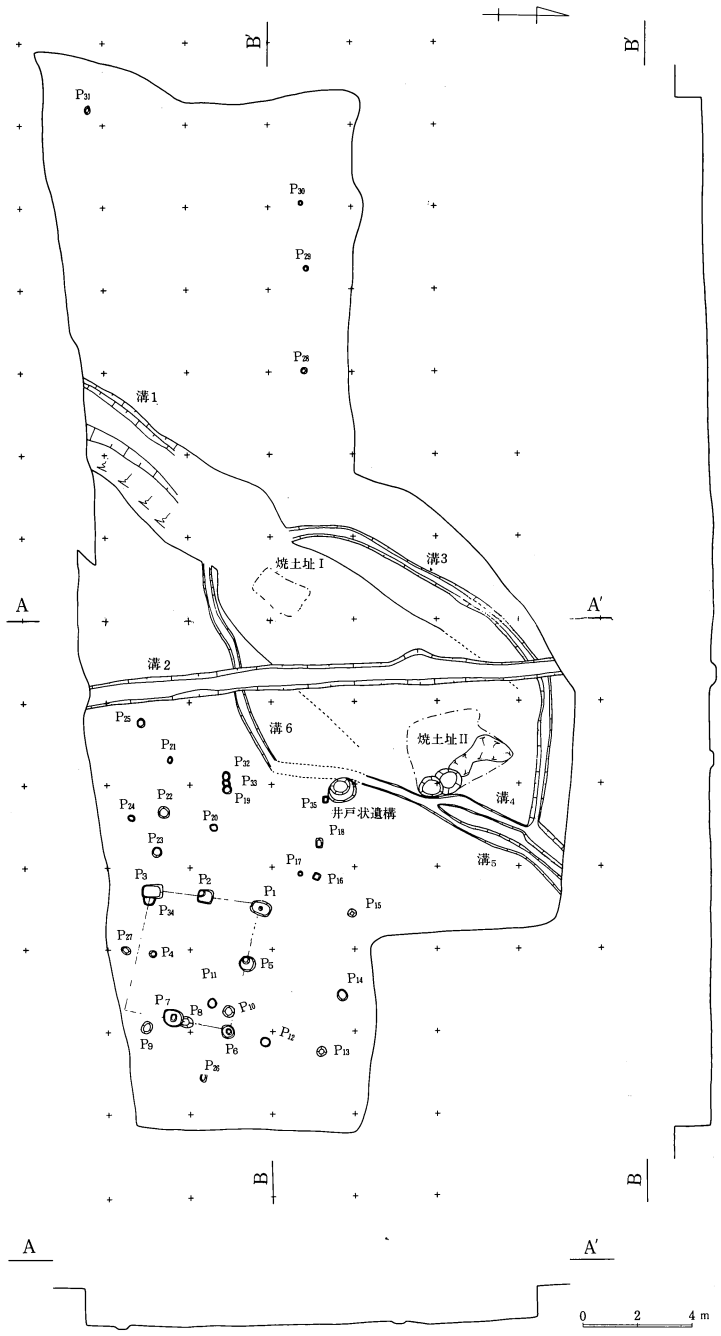
遺跡の土層断面図

(5)耕土、下層(1)（壌土）は、寺家・下神を流れたかつての鎖川の末端堆積か、現河床の流れの堆積か明らかにできない。両方の可能性もある。現河床に沿いながら、極めて沖積土の発達がよい。

(6)地下水は土地の人のいうように極めて低い。開発には当然かんがいが必要で、歴史時代の自然水路と計画水路が明らかになると、更に地形、堆積層の知識が進むと考えられる。

(7)遺構は下層土(1)(2)へ切込んで存在するので、上部層を除いた両下層土の堆積後と考えられる。

第２図　発掘調査地区の範囲


B′
B
A
A′
P31
P30
P29
P28
溝1
焼土址Ⅰ
溝3
溝2
溝6
焼土址Ⅱ
溝4
溝5
井戸状遺構
P25
P21
P32
P33
P19
P35
P22
P24
P20
P18
P23
P17
P16
P3
P2
P1
P15
P34
P27
P4
P5
P11
P14
P7
P8
P10
P12
P9
P6
P13
P26
0
2
4 m

第３図　調査地区全体図

第3章　調査の結果

1．調査の概要

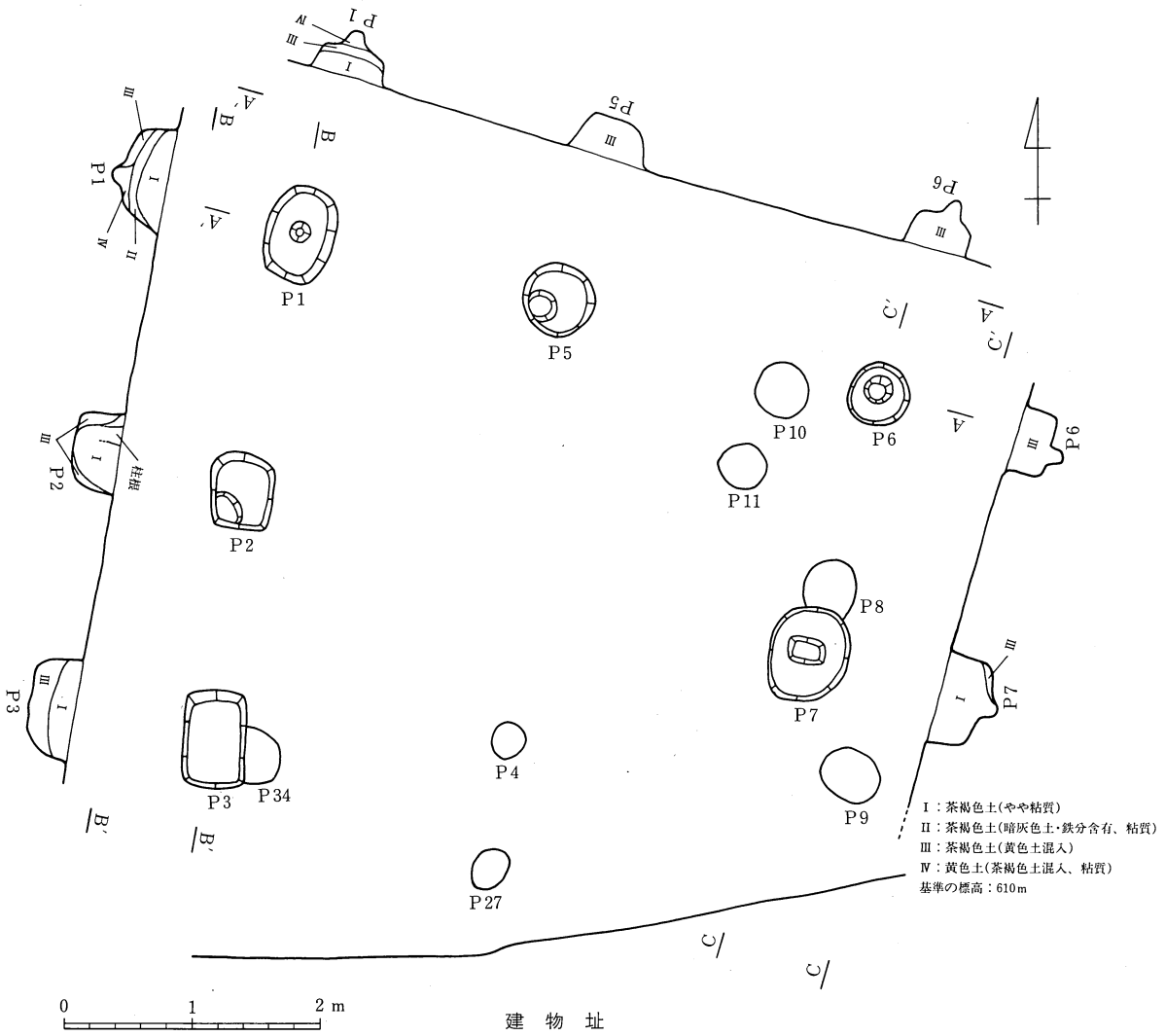
梶海渡遺跡は松本市神林地区に所在し、鎖川の北側に位置する。今回の調査地は以前の遺物出土地周辺に設定した。調査面積は470m²である。検出面までが非常に深く、表土上より100～130cmであった。検出面は黄茶褐色土で西側より東側が深い。確認された遺構は掘立柱建物址1軒、井戸状遺構1、ピット28、溝6、焼土址2である。この他検出面より60cm上に火葬墓1基が確認された。形状及び規模は南北に長い隅丸長方形で100×80cm、深さは35cmを測る。茶褐色土内に掘こまれ内部は炭化物層で焼骨は大部分が中央部にあり焼土粒がごく僅か混入しているのみで周囲の土は焼けていない。

2．遺構と遺物　（第4・5・6・7図）

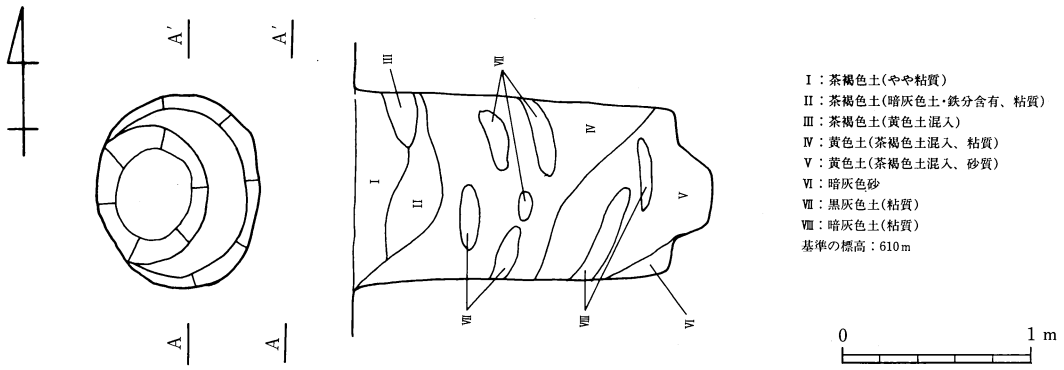
掘立柱建物址1　調査地区の東側南寄りに位置し一部が地区外へかかる。規模は2間×2間（460×410cm）の側柱式で、柱間隔は南北方向で200cm、東西方向で約200cmを測り全体の形状はほぼ方形となる。南側の中央柱穴は確認できず、また東南角の柱穴は地区外のため不明である。柱穴の形状及び規模はＰ5，6は円形、Ｐ1，2，7は楕円形で、Ｐ3は長方形で割合い大形である。深さは30～47cmを測る。柱痕が確認できたものはＰ1，2，5，6，7であり、Ｐ3については断面観察でも確認できなかった。覆土はやや粘質の茶褐色土で、下層は黄色土が混入し、柱痕は黒灰色土となる。遺物の出土は見られなかった。

溝　今回の調査で確認された溝は全部で6本である。溝1は調査地区の中央部を西南から東北方向に検出された。巾は南西側で420cm、中央部で約470cm、深さは60cm前後を測る。断面観察では砂質層と砂利を含む砂質層があり、ゆるい流れがあったものと思われる。溝1上の中央部から東北側には他の遺構があり、範囲の確認ができない。遺物は、上層に須恵器甕片が出土し、下層からは石鏃1点が出土したのみであった。溝2は調査地区の中央部に、南から北にほぼ直線で検出された。巾は70～60cmで南側がやや広い。深さは30～50cmで北側がやや深い。覆土中に砂、砂質層及び砂利層は確認されず、少量の焼土粒が混入している。遺物は須恵器、土師器の小破片のみである。溝3，6は溝1より分流して東北側で合流し溝4，5となる。巾は40cm前後で、深さも20cm前後と浅く小規模である。遺物は、溝3の北側で須恵器甕片の出土を見たが、焼土を伴うため別の遺構かとも思われる。他に遺物の出土は見られなかった。

井戸状遺構　調査地区の中央やや東寄りに位置し溝6の推定線に接する。形状及び規模は200cm×90cmの楕円形を呈し、底部は二重底で深さは167cm、190cmを測る。覆土は上層で茶褐色土、下層では黄色土で粘質の黒灰色土及び暗灰色土がブロック状に入りこんでおり、粘質土から砂質土へと移行する。遺物の出土は見られなかった。

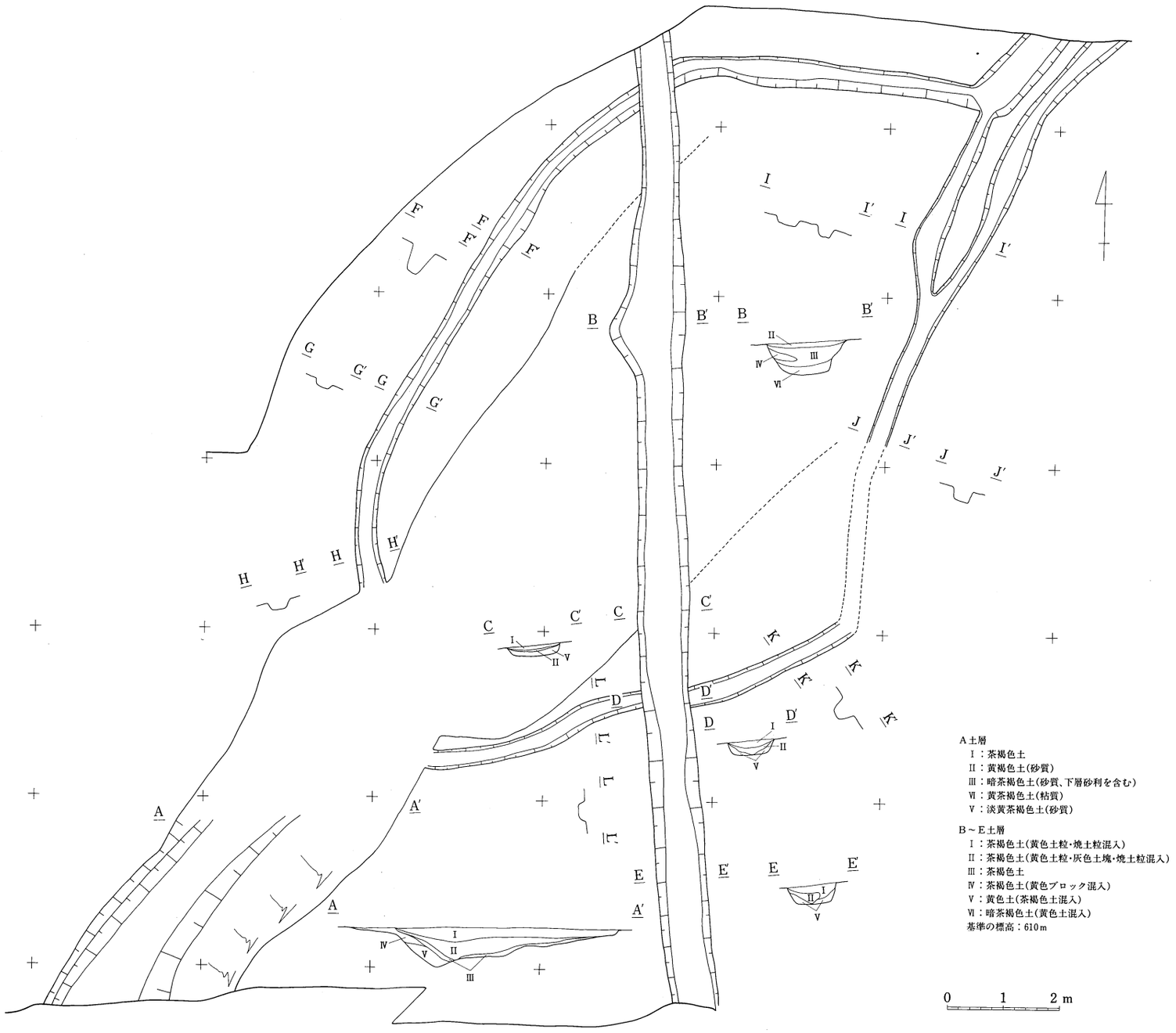


建　物　址

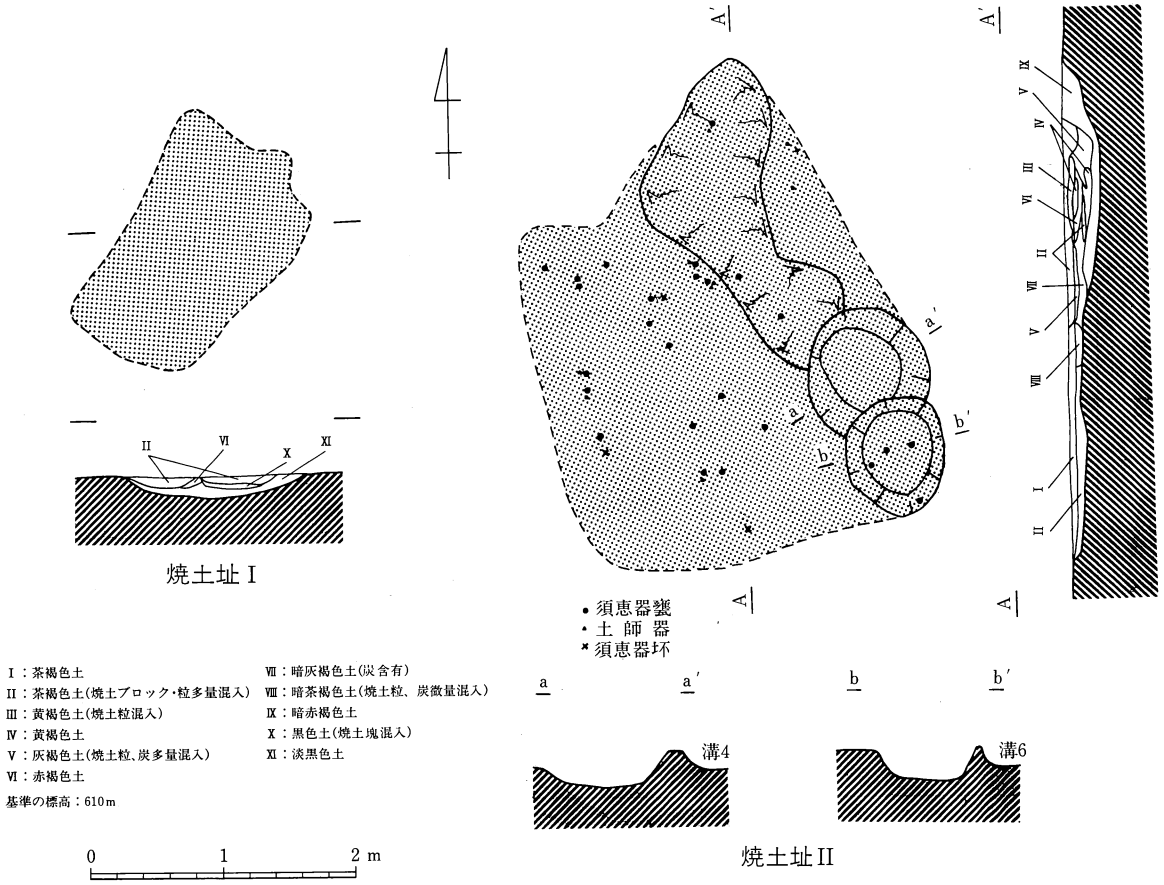


井戸状遺構

第４図　建物址・井戸状遺構


A土層
Ⅰ：茶褐色土
Ⅱ：黄褐色土(砂質)
Ⅲ：暗茶褐色土(砂質、下層砂利を含む)
Ⅵ：黄茶褐色土(粘質)
Ⅴ：淡黄茶褐色土(砂質)
B～E土層
Ⅰ：茶褐色土(黄色土粒・焼土粒混入)
Ⅱ：茶褐色土(黄色土粒・灰色土塊・焼土粒混入)
Ⅲ：茶褐色土
Ⅳ：茶褐色土(黄色ブロック混入)
Ⅴ：黄色土(茶褐色土混入)
Ⅵ：暗茶褐色土(黄色土混入)
基準の標高：610m
0 1 2 m

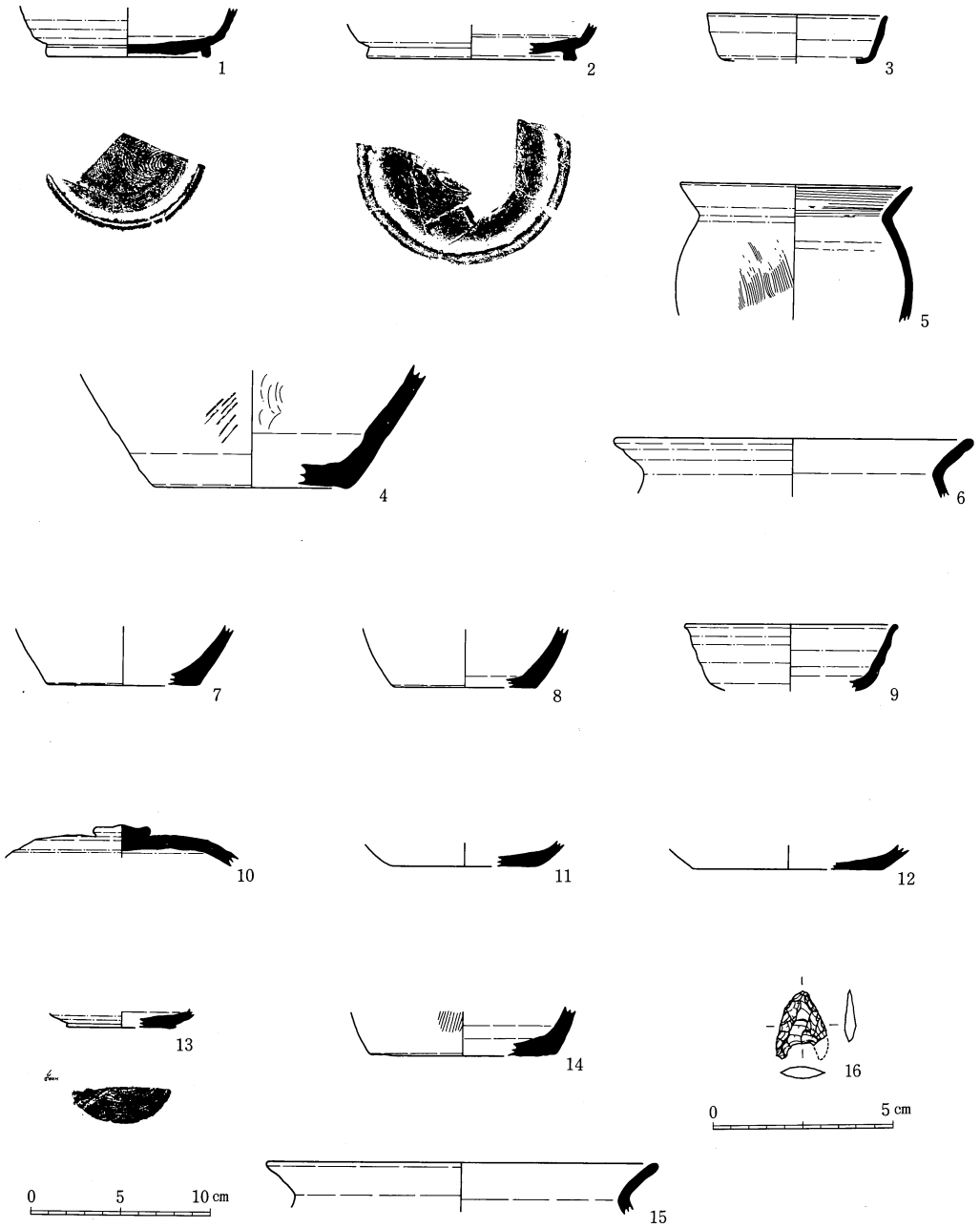
第5図　溝　　址



第6図　焼土址

焼土址　今回の調査では2ヶ所に確認された。焼土址Ⅰは調査地区の中央、溝1上にあり、形状は不整形である。長軸で200cm、短軸で120cmの範囲に厚く分布しており、周辺部にも少量の焼土粒が見られる。浅い掘り込みになっており、上層は焼土塊が混入し下層は底部自体が焼けて焼土層をなしている。遺物は、釘と思われる鉄製品1点と須恵器甕片が数点のみであった。

焼土址Ⅱは調査地区の北側東寄りに位置し溝4及び6の西側に接する。形状は焼土址Ⅰと同様に不整形をなし、巾は280cm、長さは長い所で370cmを測る。内部は不整形の落込みと円形の落込みがあり、円形の落込みは2ヶ所に確認され、南側が北側を切っている。落込みの深さは10～20cmである。焼土址Ⅰと同じく、底部自体が焼けて焼土層をなしている。遺物は須恵器坏、甕、土師器甕であるが、全て破片で、図示し得たものは僅かである。出土遺物中最も多かったものは須恵器甕の破片である。口縁部片及び底部片は無く、頸部片1片であとは全て胴部片のみであり、接合しえるものも無かった。また、焼土中より焼骨片が出土したが少量であるため不明である。焼土址Ⅱの北側、溝3内に焼土があり須恵器片が出土している。範囲は広くないがⅠ、Ⅱと同様のものと思われる。



第７図　出土遺物実測図

出土遺物　出土遺物は全部で約120点で、その半数は須恵器の大甕片である。また一部甕は二次焼成を受けている。図示したものは器形の判るものを中心としたため、小型のものが多い。時代的には縄文時代より平安時代までにわたり、検出面上部では中世の墓壙があり、皇宋元宝、元豊通宝他、計四枚の古銭をだしている。1～3は須恵器の坏で、1は赤焼けで高台はつけ高台、底部は回転糸切りで高台縁を斜めにナデている。2も高台付坏で、高台はつけ高台、底は回転糸切りである。内面の立ち上がりはくびれて強い角度で立ちあがる。3は薄手のもので身の外部中央に稜をもつ、丁寧な作りである。4は黄灰色を呈する須恵器甕の底部である。外面に叩き目があり、内面は当て具跡がつく。5～8は土師器で、5は小形甕の上半部である。口縁は直に立ち、胴は丸みが強い。口縁部はよこナデ、胴部は細かいはけ状工具によるナデがある。6も甕の口縁部、7・8は共に甕の底部である。8には外面縦にナデ跡がのこる。9～13は須恵器で、10が蓋の他は坏である。9はやや深目の坏で三段の緩い稜をもつ。10・12は共に赤焼けで10は蓋上部をへら削りし、平らなつまみをつけている。内面には渦巻き状の調整痕が残る。12は糸切り底の坏で腰に僅かな稜をもつ。11・13は共に糸切り底で、11は丁寧なつくりである。13は底の切り離し跡がはみでている。14・15は土師器で14は甕の底である。二次焼成か強い赤褐色で器面があれている。15は甕の口縁部で強く外反する。器面はあれている。16は赤チャートの無柄の石鏃で重さが0.81gあり、長さに比して幅が広くえぐりも広い。縄文時代のものである。

土　器　観　察　表

No.	出土地点	種別	器形	寸法				色調		成形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底部	器高	重量	外面	内面		
				cm	cm	cm	g				
1	焼土Ⅱ	須恵器	坏(高台)		9.1		94	茶褐	茶褐	内外面ロクロナデ　回転糸切り　ツケ高台	底部½
2	〃	〃	〃		(11.6)		76	灰白	灰白	〃　回転ヘラ削り　〃	〃 ⅔
3	〃	〃	坏	(10.0)			5	灰	淡灰白	〃　〃	口縁⅙
4	〃	〃	甕		(10.8)		230	淡黄灰	淡黄灰	外面たたき目(磨滅激しい)　内面あて具痕(輪積？)	底部⅓
5	〃	土師器	〃	(12.9)			62	茶褐	茶褐	内面横ナデ　ナデ　外面ハケ目	口縁⅓
6	〃	〃	〃	(19.9)			11	明茶褐	明茶褐	内外面ナデ　口縁横ナデ	〃 1/10
7	〃	〃	〃		(8.5)		28	茶褐	茶褐	〃	底部¼
8	〃	〃	〃		(7.9)		25	暗茶褐	明茶褐	〃　(輪積？)	〃 ⅙
9	溝　2	須恵器	坏	(11.8)			16	灰	暗灰	内外面ロクロナデ　口縁横ナデ	口縁⅙
10	検出面	〃	蓋		−		55	茶褐	暗茶褐	〃　上面回転ヘラケズリ	つまみ¾
11	〃	〃	坏		(6.1)		15	暗灰	黄灰	〃　回転糸切り	底部⅓
12	〃	〃	〃		(10.6)		11	暗褐	暗褐	〃　〃	〃 ⅙
13	〃	〃	〃		(8.0)		10	灰	灰	〃　〃	〃 〃
14	〃	土師器	甕		(10.4)		104	茶褐	明茶褐	(輪積)	〃 ½
15	〃	〃	〃	(21.8)			15	茶褐	茶褐	横ナデ	口縁⅙

第4章　調査のまとめ

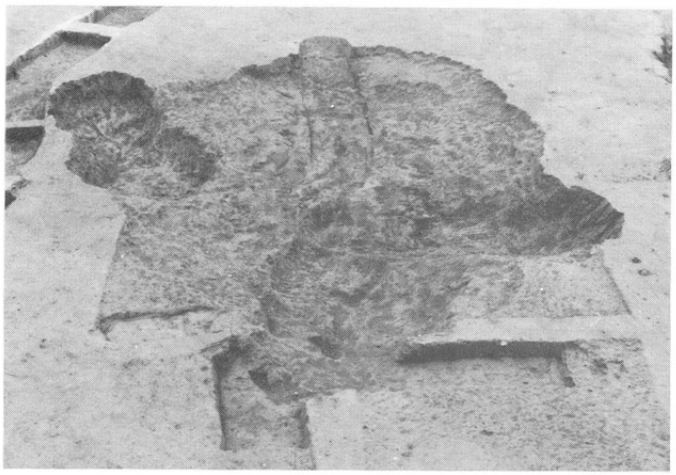
梶海渡遺跡は松本市西部の水田地帯、大字神林字梶海渡に所在し鉢盛山麓に発祥する鎖川が奈良井川と合流する地点に近い左岸に位置する。神林地区では昭和58年に下神遺跡の調査が行われ今回が2回目の調査である。同周辺は以前から住宅建設、または水道管埋設の際に遺物の出土が知られており今回の調査となったものである。今回の調査で確認された遺構の検出面は、耕作土より130cm程下であり鎖川の扇状地として河川の影響を大きく受けている。

確認された遺構は、掘立柱建物址、溝、焼土址、井戸状遺構、ピットがある。以下溝及び焼土址について少し検討を加えてみたい。溝は、1～6まで6本検出された。溝2以外の方向は南西から北東で、鎖川の流れと一致している。溝2はほぼ直線的に南北方向を示す。遺物の出土状況は、溝1の上層から須恵器甕片が、また底部付近から石鏃が出土した。石鏃はやや磨滅しており、上流から流されてきたものであろう。溝2も少量で小片のみである。断面の観察結果も溝2では砂層、砂利層等は確認されず、これらのことからも溝1、3～6は自然流、溝2は人為的かあるいは自然流に人手が加えられたかのどちらかであろう。焼土址については、溝1上で溝3～6に囲まれて2基が検出され、2基とも検出面での平面プランを確認することは困難であった。トレンチによる掘り下げの結果、規模は焼土址IIの方が大きい。内部の状況は2基とも同様で、浅い落込み状になっており、焼土のブロックと、土自体が焼けて焼土層をなしているものとが認められたため、ある期間に亘って実際に火の焚れた址であろう。遺物はほとんどが須恵器甕片であり、底部及び口縁部片は無く、ほとんど胴部片であることから、容器としての使用が困難となったため廃棄されたものと思われる。またこれらの破片の中には、割口が火を受けていたり、炭化物が付着しているものも認められるのでこの焼土址は、1回の廃棄ではなく、少なくとも2回以上継続して使用したものであろう。これらの遺物から見て、時期は平安時代後半以降と考えられる。

次に溝及び焼土址相互の時間的関係について述べてみたい。位置から見て、溝1が最も早く、溝3、6は同時期に溝1より分れたものと思われる。焼土址は、溝1が埋った後、また溝3、6が分れた後の時期になり、溝2は焼土粒の混入から焼土址と同時期ぐらいと考えられ、溝4、5は、溝3、6と同時期と推定する。しかしこれらのものが全て、自然的時間の経過とともに形成されたかどうかは不明であり、焼土址のために、溝3、6が人為的に行われたとも考える。以上が今回の調査から考えられる所見であるが、特に焼土址の様な遺構は他の調査でも記述が少なく類例を求めるのがむずかしいため今後の調査に期待したい。

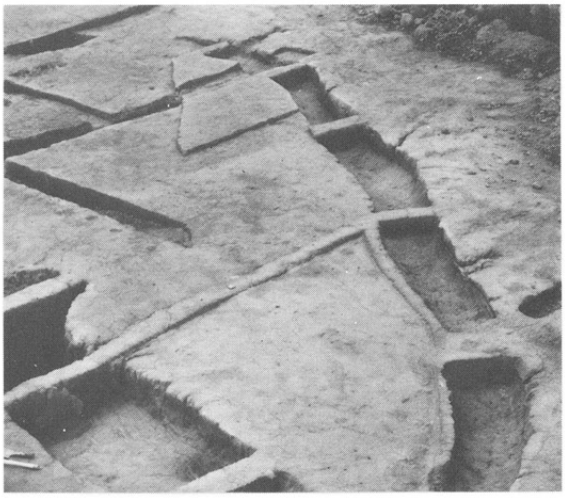
最後に、今回の調査においてお世話いただいた地元のみなさま、神林土地改良区をはじめ、8月の炎天下調査にご協力いただきましたみなさま、また調査以外にも何かとお世話になった近隣のみなさまに心から感謝申し上げます。

焼土址 I



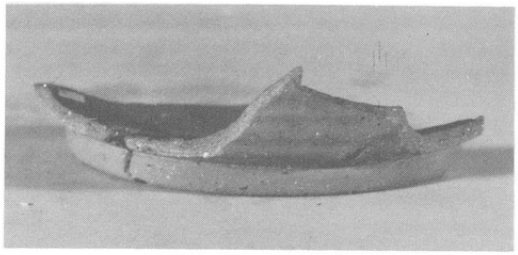
焼土址 II

溝 2

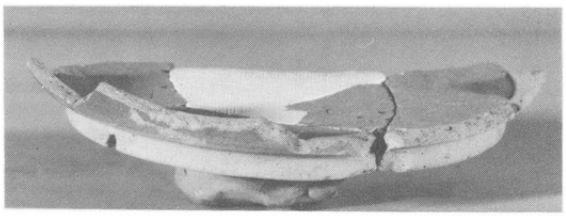


溝 3

図版 1

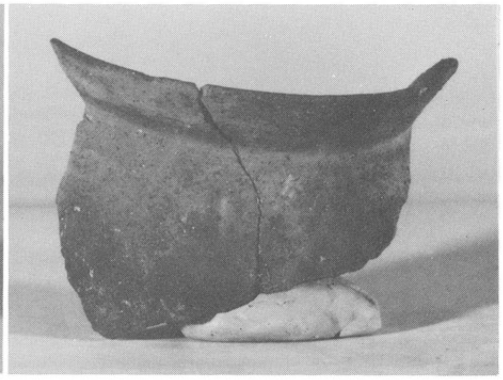


1

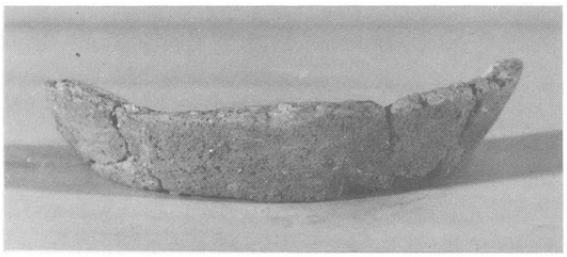


2

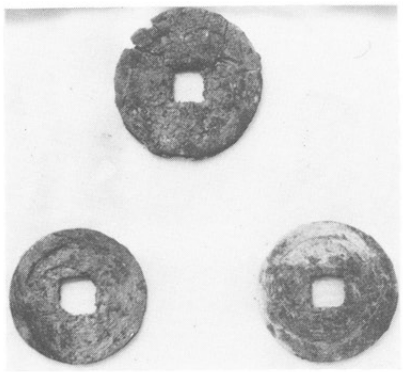
4



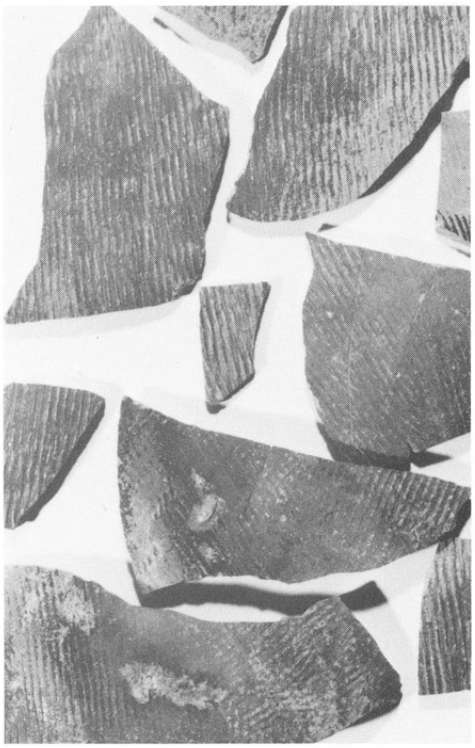
5



14



墓壙
出土古銭



焼土址出土
須恵器片

図版 2

松本市文化財調査報告No.40

—松 本 市 梶 海 渡 遺 跡—

昭和61年3月20日　印刷
昭和61年3月31日　発行

発行　長野県中信土地改良事務所
　　松 本 市 教 育 委 員 会
印刷　株式会社　綜 合 印 刷 所